

Was Huck Bulkington?

——水の旅、消える南部

後藤 和彦

水と死——イシユメールとハックルベリー・フィン

▼「世界の水あるところ」『白鯨』のイシユメールは言う、海に出ることは彼にとつて「拳銃と実弾のかわり」なのだ、と（十八）。

ハックルベリー・フィンは「河に出る」。海は見たことさえなかったからかもしれない。河はひとたび河口に到達すればおしまいで、その先に河はもうない——と言えば、その完全な一回性は、たちまち人生や命の喩となる。海には海流があつてそれをたどつてやがてもとの場所に戻ってくる回遊があり、陸に生きる人が「海に出る」とは擬似的な死を体験することの謂いならば、ナンタケット島を出帆しついに太平洋の藻屑となつて消えるピークオド号は、海ではなくてむしろ「河を下る」旅に出たのだ。

死を「河を下る」式にこの時間の果てにあると思うのか、あるいは「海に出

る」式にこの人生という船の底板のいつもすぐ下にあると見るのか、いずれ死は、「世界の水あるところ」を介して、あるいは、水ある時間に隔てられてある。人が古来そう考えてきたのは、つまり人が胎内の羊水という生・未生のあ、わいを抜け出してきてはじめて生きるからなのだろう。だからイシユメールも、海に出なければならぬものの思いを語るのに、水に溺れて死んで自分の生を完遂するナルキツソスを引き合いに出さずには終われない——「ナルキツソスが泉に見出したのと」同じ幻を、すべての川、すべての海に見るのがこの我々、我々自身にほかならぬのではないか。触れがたき生の幻の幻、生をめぐる一切の謎を解く鍵がそこにある」(二〇)。

▼水へいざなわれる人 ハックルベリー・フィンが「河に出る」理由は陸にいれば命の危険に直接にさらされるからだ。だが、その命の危険をもたらずのが、彼に命を与えた実の父親である事実は、この少年が、そもそも水にいざなわれて生きるべく宿命づけられてあったことを意味するだろう。だから、ダグラス未亡人とその妹ミス・ワトソンに引き取られ、*“civilize”* されて——とはつまり、人並みに——生きていけば、彼はどうしても死にたくなる。「ああしろこうしろ、あんまり突っつきまわされるから、おいら、もううんざりしちまって、すぐくさみしくなった。……ろうそくをもつて自分の部屋にもどって、テーブルのうえにおいた。それから窓際の椅子にすわって、何か楽しげなことを考えてみようとしたけど、だめだった。とてもさみしくて、おいら、死にたくなつた」(四)。

イシュメールもハックもそれぞれ「人並み」に生きていけば、憂鬱で体も心もさびついてくるようで、だから辛抱ならないから、いっそ死んでみたくなる。最後の最後は生きてどこかにたどり着くのだろう、たどり着いた先は、取るにたらぬ差こそあれ、人の住む「人並み」の世以外ではあるまい、しかし、それならばぎりぎりまで「死んで」いたいのだ。

ハックが「河に出る」にあたって、野豚を屠つて陸に残るものたちにみずからの死を偽装するのは(四〇一)、死出の旅に出るものの書置きのようなものだ。その心は、海に出るとき「イシュメール」と偽名を名乗ったイシュメールの心と、さほどの差はない。イシュメールがこうして惜しまなければならぬ家名を受け継いだのは、ハックが吸いたい煙草をそれは「とても悪いこと」だから絶対に吸ってはいけないと命ずる「継母」たちがいるのと同じことだ、あるいは、アル中の発作で息子を殺してしまうかもしれない実父をもつたのと同じことだ。

何もかもわずらわしいのだ、彼らのようなものにとつて。こうやって生きている自分がほんとうだとどうしても認められないのだ。だからほんとうの自分と出会うために、この世に生かされている誰か自分と似たものの痕跡を消し去ろうというのだ。あるいはこの世に生きているもの以外に「ほんとうの自分」などないのならば、自分ではないものになりたいたいのだ。自分ではないものになれる場所に行きたいのだ。

▼水の彼方、幻への旅 彼らふたりはいずれも母を失っている。イシュメール

には、息子よりも家名が大切な、だからまさしく継母らしい継母があった。その継母から食事抜きでまるまる十六時間寝室に閉じ込められる仕置きを受けたとき、夢うつつのイシユメールを見た、いや自分の手を触れるのを確かに感じた、「形も見えず、名づけようもない、ものいわぬ何か、それは自然を越えた存在なのか、それとも幻なのか」、あれはいったい何者だったのか(二二七)。あれは息子を案じて現れた亡母だったのか。幻の母は——ナルキツソスの幻と同じ、水のあちら側にしかもういない。

「あの世」に行くにあたって、それでも人は道連れを得たいと願うのは、思えば人の度し難く人たる所以と言えばよいのか。ただし、イシユメールにせよハックにせよ、「世界の水あるところ」への旅路に、彼らの「この世」における「異人」をともしなうのは、この世に嫌気がさして「あの世」を行くふたりの同行として、まずはふさわしい。すなわちイシユメールのクイークエグであり、ハックのジムである。

クイークエグはイシユメールに添い寝し、「額を私の額につけて、腰のあたりをぎゅっと抱きしめ」、「結婚」と彼の呼ぶ親密な契りを交わす(五六)。ジムはハックを「可愛い子 (Money)」と呼び、河上で深い霧にあつてカヌーと筏に離れ離れとなったハックを求め、名を呼び、絶望し疲れ果て、そして果たされた再会を神に謝して感涙にむせぶ(一〇三)。イシユメールも、ハックも、それは味わった記憶のないやさしさ、いや、記憶していることをこちらから忘れなければいられなかったやさしさ。ふたりの異人は、この世にしいたげられ

て幻となりはて、今や水の彼方にある彼らの母親たちの、この世に許された姿だったのかもしれない。

イシユメールとハックの旅に彼らの亡母が帯同しなければならぬのだとしたら、それは彼らの旅が「水あるところ」への旅であるからだ。その旅は「生の幻の幻、生をめぐる一切の謎を解く鍵」への旅だから、彼らを謎のなかへ産み落として、みずからは幻の彼方へ消えた母の影が、旅立つふたりに寄り添うのだ。

同行異人の行方——クイークエグとジム

▼南海の王子と逃亡奴隷　しかしながら、『白鯨』を読む誰もが、言われてみれば不審に思わずにおられぬことは、「世界の水あるところ」の旅にふさわしい同行異人クイークエグが、「水あるところ」をともし志して意をひとつにし、こうして睦まじく結ばれたのにかかわらず、肝心の「水あるところ」に到達してから、次第に疎遠な人物になってゆくところだ。

ジムの「この世」——ピークオド号がナンタケット島を出航したのとほぼ同じころのミシシッピ沿岸一帯、南北戦争前のいわゆる「旧南部」——オールドサウス——における異人性は、つまり、彼の影の影たる所以は、彼が黒人であるばかりでなく逃亡奴隷でもあることで二重化されているのだが、「水あるところ」の旅程がハックをこの異人に次第に強く結びつける。ただ互いに求めるものを与え合う——ハックはジムの包容力によって寂しさや不安を癒されることを、ジムは少

年とはいえ白人ハックに、この筏のうえにさえ時折嵌入してくる「この世」からの守護を求める——ひとつの默契が、次第により深い情愛へと鍛え上げられてゆく。ミシシッピに浮かべた筏のうえのふたりの美しさは、ついに神話的なものを喚起しさえする——陸に広がる「この世」に背を向けて、ふたりが筏のうえにいつまでもい続けられるなら、そして河に終わりが無いのなら。

一方、『白鯨』にあつては、一見してこれとは逆の事態が起こっている。たとえば、作品第一一〇章——船倉での過酷な作業の結果病を得たクイークエグは、一向に回復の兆しなく、やがて死期を悟り棺桶を作らせて死ぬ準備を万端整えるのだが、陸地でし残した仕事を思い出したからという理由で、「気持ち切り替えて、死なないことにする」(三六三—三六八)。このエピソードを語るのは、南海の王子クイークエグとあの深い契りを交わしたイシユメールにほかならぬが、イシユメールによつて「哀れな蛮人」といつの間にかよそよそしい名で呼ばれているクイークエグが、自分の棺桶の作成を依頼するのは、そうであつてしかるべき「心友」イシユメールではなくて、名もない「仲間」であり、さらには自分の守り神としてイシユメールに礼拝を乞い、イシユメールも進んでこれに応じ額づいたあの偶像ヨジヨを、「自分の雑囊のなかから持つてきて欲しい」と末期の願ひとも呼べそうな依頼をする相手も、解しがたいことに、ほかの誰かなのである。

『白鯨』のこの奇怪な点については、すでにハリソン・ヘイフォードが久しく前に注目していたところで、つまり、深い契りを結んだ「心友」がじゅうぶ

んな説明もないままに疎遠になってゆくのはいかにもいぶかしく、むしろ海上の章から陸の章に向かって逆に読む方が自然に思えるかのようなのは、小説執筆の半ばで、作品の登場人物の配置方針に重大な変更がなされたためである。

ヘイフォードによれば、作者メルヴィルは『白鯨』執筆にあたって、陸の上のシーンから書き始め、続けて海上の章をあらかた書き終えたあと、何らかの理由で、ピークオド号に乗り組んだひとりの蛮人鋸打ちであったばかりのクイークエグの役割を、語り手イシユメールの「心友」へと格上げし、陸上の章をその線に沿って書き改めながら、クイークエグを格上げしたあとの始末を、あらためて海の章に立ち返ってじゅうぶんには行わなかったことによるのだというのである。

▼消された人 またヘイフォードは、この考え方に従えば、作品早々に印象深い登場場面を与えられながら、その後ほとんどすっきり姿を消してしまうひとりの人物の消息もまたわかるというのだ。つまり、それは作品第三章に紹介されるバルキントンという人物なのだが、バルキントンは、その後たった一度、イシユメールの乗るピークオド号の舵を執っている姿が目撃され、しかも二度目に出会うその「全六インチの短章」たる第二章が、この人物に捧げられる「墓標」となって、事実その通りに作品の世界から抹消される。

さらにヘイフォードによれば、このバルキントンなる人物は執筆当初の役割として、クイークエグが果たすイシユメールの「心友」としてばかりではなく、完成後の作品においては、ピークオド号船長エイハブ、おのれの片足をもぎ

とった白鯨への憎悪に冷たく狂った、あの神をも畏れぬ男に所属することになる、「真理の追究者」の側面をも与えられていたのだという。つまり、バルキントンは非常に重要な役割をもつて登場してきたが、その役割をほぼすべて、異人ともうひとりの「異人」に譲り渡してしまうのだ（六七四―九六）。

このバルキントン、言うなれば中身をすっかりほかの登場人物に譲り渡してしまつて、おのれは沈黙を守り続ける。その沈黙は徹底していて、テクスト上に姿を現わすほんのわずかなときも彼は黙して語らない。『白鯨』の登場人物はもちろん語り手のイシユメールをはじめ、エイハブも、航海士たちも、海中に没して気の触れたピップも、いや英語の不確かなクイーケグでさえ、イシユメールを介してなかなか饒舌であることを思えば、むしろこのバルキントンの沈黙は、逆に一層際立つて映りさえする。登場の回数がきわめて少ないにもかかわらず、バルキントンがこうしてどこか忘れられなさを読者に印象づけるのは、しかしながら、ただヘイフォードがたどつたような執筆過程上の事情や都合から導き出されるばかりではないのではないだろうか。

バルキントンが「その声ですぐ南部人とわかる」人物であること（二九）は、彼が作品途中から姿を消してしまうことと何らかの係わり合いを持ち得るのではないか。またそのことを通じて、当初より引き合いに取り上げてきた、南部作家マーク・トウェインの南部批判の小説『ハックルベリー・フィンの冒険』とこの『白鯨』との歴史的な係わり合いも、ゆくりなく見えてくるのではあるまいか。

南部の人、バルキンントン

▼『白鯨』と南部 バルキンントンが南部人であることに着想を得、もって『白鯨』における南部性を論じてみせた研究成果が本邦にはある。舌津智之の「センチメンタル・キャビン——『白鯨』と南部」である。舌津はバルキンントンが当初の地位をエイハブに譲つてみずからは端役へと降格され（この論文ではクイークエグを考慮外においている）、テクストの裏側に抑圧されたのであるのだとすれば、「そこから必然的に導かれる」結果として「エイハブもまたその深層において南部人を表象する」こと、総じて、バルキンントンという「南部人の象徴的な抹消は、『白鯨』というテクストにおいて、回帰を宿命づけられた抑圧と化している」ことを、たとえば作品一一一章の「エイハブの額に浮き上がる血管のデルタ」にミシシッピ河のデルタを幻視し、そしてエイハブが「アラバマ・ボーイ」ピップを我が子のごとく招く彼の居所、すなわち、船長室キャビンに、ストウ夫人の『アンクルトムの小屋』の奴隷小屋キャビンを幻視しつつ、作品全体に伏流のごとく脈走する南部性をあぶりだす。

舌津論文の趣意は、ニューヨーク州生まれの作家が一八五一年に出版した小説のテクストに南部的なものの露頭を見出すことであり、「南部に生まれなければ南部小説は書けないのか」という問いに、果敢に「否」と答えるところにある。そして「『白鯨』と南部」という問題設定は、地理的な境界線がもはやアイデンティティの輪郭を保証しないボーダーレス状況の進む今日、言語芸術の

審美的・政治的な（不）可能性を考えるうえで、ひとつの新しい糸口を提供するように思われる」と論考を結ぶ（六一九）。

舌津の投げかける挑戦——「南部に生まれなくとも南部小説が書ける」——に私が簡単に首肯しえないのは、南部作家ウィリアム・フォークナーの『アブサロム、アブサロム！』の語り手クエンティン・コンプソンが聴き手のカナダ人シユリーヴ・マッキヤノンに言う台詞——「君にはわかるわけではないよ、南部に生まれなければ到底わからんよ」（二八九）——が思い起こされるからかもしれない。こういう発想は悪しき「構築主義」と批判を受けるのかもしれない。同じ批判者は同じ『アブサロム、アブサロム！』において同じクエンティンとシユリーヴが、それぞれ等しくサトペン物語に共鳴し、あまつさえ互いが互いに深く没入しあう点を挙げ、小説の一節「話しているのはシユリーヴだったが、ふたりの故郷のあいだに存在する緯度の違いがもたらしたわずかな違いを（語調とかアクセントの違いではなく、言い回しと言葉遣いの違いを）別にすれば、話しているのはどちらでもよく、ある意味ではふたりともが話していることになったからだ」という箇所を引きさえるかもしれない（二四三）。

ただ、私は上に引用した箇所を書いたフォークナーの真意とは、クエンティンとシユリーヴの生まれたふたつの場所のたかだか「緯度の違い」でしかないものが、ほとんど絶望的な違いとなるのだという発想の、その臆面もない非合理ないしは根拠なき非——根拠こそが、南部人たちにとっての南部性の根拠なのだという点にあると考えている。

▼〈南部〉の誕生　そもそも南部というものが形成されるにいたった経緯には、十九世紀最初の四半世紀、北東部に澎湃として巻き起こった奴隷制度解放運動があり、もちろん奴隷制度を経済の基盤に据えた南部は、背に腹はかえられぬという実質的根拠をもってこれに反旗をひるがえしたのだが、この反・奴隷制度への南部全土をあげての傾倒没入が、奴隷制度への外部からの介入を嫉妬深く退けることを根本綱領として南部政治に真の独自性を与える一方で、この制度の倫理的・宗教的な枢要性を追求し論じる知的階層を形成し、そこに初めて〈南部〉という文化の言説的実態、つまり「南部の精神」が、対抗的に誕生していったとは、つとに指摘されてきたことでもある。

南部の南部性とは、実のところ、「南部の精神」というとらえどころのない幻、漠として実体のないものそのものことであって、外部から南部とはかくあるという認識に対抗してそれにことごとく「否」という心の動きを指しているのだとも言える。もちろん『白鯨』が書かれ出版されたとき、あるいはハック・フィンがジムとミシシッピを筏で下っていたちようどそのころ、南部を南部とするしづけるのに奴隷制度という隠れようのない実体があったのだが、それでもなお、この奴隷制度を論ずる部外者の口元に、ひとたび侮蔑的なものをちらりとでも看取すれば、その指摘が結果としていかに正しくとも、断固違うと言い立て、決して首を縦にふらず、これを「南部固有の制度」ベキユア・イム・ステイチネーションと呼んで、批判する部外者の理解の外に嫉妬深く置かなければ決して気のすまない精神のありようこそ、〈南部〉というものの素性のより端的な姿であると思う。

歴史的には、やはりこれらふたつの小説の舞台となったのとはほぼ同じ時期、具体的には一八三六年から一八四四年まで、米国議会下院において、南部奴隷州選抜議員の強硬な働きかけのよる、いわゆる「審議拒否規定」——奴隷制度に対するあらゆる調整や変更は、結果、連邦の安寧を脅かすのは必定であるという理由で、議会における発議請願自体を抑圧する規定——が採用されていたことを思い起こしてもよい。加えて、『白鯨』出版前年の一八五〇年には、一七九三年の逃亡奴隷法をより厳格に適應する新逃亡奴隷法が施行されている。南部の精神が、時代に取り残されつつあった前近代の遺制の周辺にまつわって、自己閉塞的な孤立を深め、外部のものがうかつに触ることなど決して許されないう、あまりにももろく傷つきやすく、あたかも実体のない幻を、それでも「それはある」と言い募る人のか弱さと、そのか弱さゆえの過剰な自己主張の攻撃性をはぐくんできてゆく、そんな時代であった。いよいよ南部が実在し始めた時代——いや、南北戦争敗北後にさらに明瞭となるはずの、〈南部〉という非存在の逆説的存在性をあらわにし始めた時代——であった。

幻の南部

▼消える南部人 つまり、「南部の精神」は戦争に徹底的に敗れ、奴隷制度という南部を識別する根拠ないし実体を失ってはじめて、あるいは「南部の精神」とはその具体的指示対象としての奴隷制度から自立してはじめて、その真の実体をようやく明らかにする。『ハックルベリー・フィンの冒険』が、南北

戦争が終結して二十年後、あえて奴隷制度のあった旧南部のただなかに遡り、そこに逃亡奴隷とともにいたいけな南部の少年を送り込み、傷つかせ、「改心」させるといふのは、つまりは単なる結果の見えすいたアナクロニスティックな芝居ではなく、「南部」という実体なき実体の創生でこそなければならぬ。

この小説の執筆動機の底に、やがて敗北に汚染される場所に生まれ落ちてしまったトウエインの、おのれの生の根拠から、旧南部という敗北の亡霊を、戦後に確立した政治的正しさに照らしてエクソサイズする企図があるのだとすれば、それは南部少年ハックが、彼の言葉によつて今創生される「南部」から、それが創生されるや否や、外部へ、つまり、小説最終章に示されているように、仲間たちをおいてひとりいまだ残る未開の荒野へ、アメリカの外へ、いや世界の外へ、消えることと引き換えに達成なき達成を遂げるのではなかったか。

南部人として敗戦後を生きることが「南部の精神」という幻にすがる欺瞞をみずからに許容すること以外にあり得ないのだが、もしそういう欺瞞をトウエインのごとく潔しとしないのであれば、幻にすぎぬ「南部」に実体を与え、その実、その致命的な存在の矛盾をついて脱構築し、その幻に根拠をもつみずから生の痕跡を抹消することが求められるのであって、小説『ハックルベリー・フィンの冒険』はまさしくそのような姿をしている。

そして、今、消え去る南部人バルキンソンが登場するわずかな場面がつぶさに検証されなければならぬ。彼は「いくぶん皆から身を引いて、しかし、皆の上機嫌は損なうまいと気遣いつつ、しかしまた、そうはいつでもやはりほか

の連中と同じように騒ぎ立てることははばかられるという様子でひとり素面である人物」として登場してくる。そして「仲間の連中の馬鹿騒ぎが最高潮に達するころ、この人はそつとその場を立ち去」ってしまふ。しかし、「何かの理由で彼は人気者なのだろう、皆、声を挙げて『バルキントン！バルキントン！バルキントンはどこに行った』と口々に叫び、一団は彼のあとを追いはじめ、そのまま矢のように宿を飛び出して行ったのだ」（一九）。このバルキントンの、どこか周囲への了解の到来を最初からあきらめているような態度はどうだろう。凍てつく海からようやく岸辺のぬくもりに心を和ませたものたちが、南国生まれの自分にいったい何を求めるものなのか、バルキントンはあらかじめ知っており、またその彼らの求めるものを自分は与えられないと悟っているようだ。

そしてこのバルキントンの沈黙は、彼の「墓標」たる第二三章においてさらに徹底した表現を得る。バルキントンは捕鯨船グランパス号で長い航海を終えて帰港したばかりであるにもかかわらず、まるで「陸は彼の足の裏を焦がすとてもいうように」——それはちょうど、みずから語り終え現出した〈南部〉から、誰よりも先に「とんずらしよう」というハック・フィンにも似て（三二六）——休むまもなく冬の嵐の海へと旅立つて行く人であった。彼はむしろ「救いを求めて危機と孤独に参入する」人、「天と地のあいだには黒々と荒れ狂う風が吹き渡り、魂を岸辺へと、人を騙し人を奴隷化する岸辺へと叩きつけようとするものである」ことを知る人、だから「安全だからといって、力なく廉恥心なく風下の岸へ駆け込むなどは唾棄すべき生き様」であると悟り、

「陸影なき寂寥の海にのみ真理は現われ、それは岸辺もなく、限りもなく、神のごとく現われ、ならば、まずもろともにあのうなりを上げる無限の空間のなかに滅びに行こう」とする人であった(九六―七)。

▼沈黙する南部 イシユメールはバルキントンを「半神」と呼ぶ。「半神」とはつまり、この世に半分しか所属していない人のこと、身をおく根拠をなかばこの世ならぬところにおいて生きることを決めた人のこと。たとえば、南部人がもつとも尊ぶ「名誉」という美德は、なかばあの世に所属するべき行動の美德である。この世らしい、人間らしい逡巡を潔しとしないこと、知的な、あるいは近代的な思弁から徹底して身を退くこと、傷つけられた瞬間に傷つけた相手が死んでいるか、傷つけられた自分が死んでいるか、どちらかでなければならぬこと (Wyatt-Brown 三五〇―六一)。徹底南部批判の書『南部の精神』の著者でみずから南部人である W・J・キャッシュは、「要するに南部人とは物を考えない人のことだ」と喝破し(九九)、そして誰よりも真に南部人たる彼は、『南部の精神』上梓後、そそくさとこの世をあとにしたのだった。首をくくったのだ。

バルキントンの沈黙を、千石英世はこう表現した——それは「一切の言葉を放棄し、自己の沈黙と孤独によって世界を氷らせて……生き続けることである。……バルキントンは、神を避け、世界を避けて、純白に凍てついた極北の地に、自ら立っている不可能の沈黙であった」(七二)。バルキントンはハックのごとく「おいらの名はハックルベリー・フィン」とも名乗らぬし、キャッシュの

ごとく「要するに南部人とは」とも語らない。名乗れば、語れば、半ば足を残したこの世からすっかり消え去るしかないことを知っているからだ。

南部人バルキントンは、南北戦争が次第に避け難くなるうとしている当時の合衆国をめぐる政治的状况において、おおよそ南部的なものが忌避されなければならなかったように、「象徴的に抹消された」のだろうか。この発想には南部の敗北をすでに見込んだアナクロニズムがありはしないか。いや、アナクロニズムとは言えないのかもしれない。南部が奴隷制度バッシングのかまびすしさのなか、ひとつの精神のありようとして、つまり「南部の精神」という幻として起動しなければならなかった差し迫った歴史的事情は、南部が南部としての実体をもつにあたって、すでにあらかじめ敗北を繰り込まれていた、あるいは実体の不在をむしろ根拠として存立する非存在の存在として現われ出で、実体の実質的根拠もまたまもなく確実に歴史から抹消されることを前提に立ち上がったと思えるからだ。

むしろバルキントンは、執筆中途の都合によって誰かにその役割を委譲しテクスト上の地位から失墜したのではなく、きわめて純粹な戦前の旧南部の表象として、作り上げられ語られ書きのこされて、この無言のバルキントンとして存在しているのではないか。バルキントンの徹底した沈黙自体がすでに、この人物がイシューメールの饒舌の産物たるテクストには表象し得ぬ何ものかとしてあることを予兆しており、そしてその予兆どおりに『白鯨』という物語から消え去ることを通じて、〈南部〉の非存在の存在性を成就するのではなかったか。

▼「ぼんやり見えてくるもの」 南北戦争が始まる十年前の小説『白鯨』と、戦争後二十年を経て世に出た小説『ハックルベリー・フィンの冒険』をこうして比較してみて「ぼんやりと見えてくるもの」のひとつは、敗北をあらかじめ宿命づけられ、宿命どおりに敗れ果てた南部という土地のたどった歴史の足跡であるかもしれない。

「人を騙し人を奴隷化する岸边」から身を翻し、「力なく廉恥心なく風下の岸へ駆け込むなどは唾棄すべき生き様」とばかりに「無限の空間のなかに滅びに行」くバルキンソンは、愛し愛される契りを結んだ逃亡奴隷ジムがこの世の掟のために囚われの身となったとき「よし、わかった、それじゃあおいらは地獄に行くさ」と決意をし（二七一）、敢然とひとりおのれ自身の自由を賭して救出に向かうハックの成長した姿だったかもしれない。そして心友ジムの自由はこの世で達成されねばならない以上、たとえ自分の自由と引き換えにしても、この世がこの世である限り、その達成は彼の力の及ぶところではないことを知って、ふたたびひとりアメリカの彼方へ姿をくらませるハックは、暖かい港で息つくまもなく次の長い冷たい厳しい水の旅に出るバルキンソンの、そして無言のうちに小説の舞台そのものからみずから姿を消し去るあの「半神」バルキンソンの少年のころの姿だったかもしれない——ハック・フィンからバルキンソンへ。

だがしかし、〈南部〉を語る言葉を持つ少年ハックは、その言葉をもたなかったバルキンソンの先にいる——バルキンソンからハック・フィンへ。ハッ

クとバルキンントンのあいだには戦争の敗北がある。ハックが言葉を持ち得た戦後の時代に〈南部〉はもはや幻ではなくなっていた——つまり、南部がその実体を失い、徹頭徹尾南部は〈南部〉という幻であることを通じてその実在を逆説的に獲得したあとであったからだ。イシュメールのごとき語り手、社会になじみ得ないところに自分というものの真価を見出し得るような、つまり〈近代〉の語り手は、戦前の小説『白鯨』のころの南部には、まだいなかったからだ。この世の産み落とした異人との結ばれとその成就維持の困難を、ことさらに意味ありげに語らなければならぬような南部人の語り手は、南部が戦争に負けて、結果、南部にもまた近代が到来してからようやくやうく生まれるのだ。

その語るに足る旅が、徹頭徹尾同行異人との旅であり、それがいかにしても「世界の水あるところ」への、「生の幻の幻、生をめぐる一切の謎を解く鍵」への、母の幻を追うような旅でなければならぬ必要は、敗北の国、幻の南部からしか生まれてはこない。メルヴィルにはそれがぼんやりと見えていた、おそらく戦前にしてすでに見えていた。

* 作品からの引用は原則として拙訳によっているが、『白鯨』*Moby-Dick*については千石英世訳『白鯨』上・下（講談社文芸文庫、二〇〇〇年）に大いに依拠した。

【参考文献】

- Cash, W. J. *The Mind of the South*. 1941. New York: Vintage, 1991.
- Faulkner, William. *Absalom, Absalom!* 1936. New York: Vintage, 1990.
- Hayford, Harrison. "Unnecessary Duplicates: A Key to the Writing of *Moby-Dick*." Herman Melville. *Moby-Dick*. Ed. Hershel Parker and Harrison Hayford. New York: Norton, 2002. 674-696.
- Melville, Herman. *Moby-Dick; Or, The Whale*. 1851. New York: Norton, 2002.
- Twain, Mark. *Adventures of Huckleberry Finn*. 1885. Berkeley: U of California P, 2010.
- Wyatt-Brown, Berram. *Southern Honor: Ethics and Behavior in the Old South*. New York: Oxford UP, 1982.
- 舌津智之「センチメンタル・キャビン——『白鯨』と南部」『英語青年』第百四七卷第十号（二〇〇二年二月号）、六〇六―九頁。
- 千石英世『白鯨の中へ——メルヴィルの世界』南雲堂、一九九〇年。